

ブラジルにおける日系移民の住空間の変遷について

—パラ州トメ・アスー移住地を事例として—

主査 熊谷 広子*¹

委員 森 弘則*², 坂口 大洋*³, 森 幸一*⁴

本研究ではブラジル、パラ州トメ・アスー (Tomé-Açu) 移住地において日系家族の住居の実測及びヒアリング調査を行った。ここでは得られた住居平面のうち、建設年代・建設者・室構成・住居規模の明らかな平面68例を用いて、住居規模、室構成要素、間取り、外観、材料、日本的要素といった項目についてその変遷過程を明らかにした。これらの変遷要因についての検討から、これらがブラジルの気候風土、地域経済社会条件と密接なかかわりをもちながら変化してきていることが明らかになった。

キーワード：1)日系移民, 2)住空間, 3)変遷, 4)トメ・アスー移住地, 5)ブラジル,
6)住宅規模, 7)室構成要素, 8)間取り, 9)日本的要素

A STUDY OF THE EVOLUTION OF THE DWELLING OF JAPANESE IMMIGRANTS IN BRAZIL

—In Case of Tomé-Açu, Pará—

Ch. Hiroko Kumagai

Mem. Hironori Mori, Taiyo Sakaguchi and Koichi Mori.

The purpose of this report is to clarify the characteristics in the evolution of the dwelling of Japanese immigrants in Tomé-Açu, Pará, Brazil. Based on the survey of the 68 plans which their construction ages, builders, plannings and scales are cleared, we specified these processes of changing on the scales, structures, plannings, exterior ornaments, materials and their Japanese elements. This analysis clarified that the changing of their dwellings has been closely connected with the climate and the social economic conditions in Brazil.

1. はじめに

明治以来120年の間に日本社会は大きく変化してきた。西欧文化の流入、経済の発展によって我々の生活様式も変化し、また現在も大きな転換の過程にある。そして同時に人々の価値観は多様化し、本当の豊かさとは何かといった問いが投げかけられている。

こうした状況の中で、我々と同じ文化的背景を有しながらも、異文化の中で生活する日本人とその子弟の住空間の変容と展開を明らかにし、その要因を考察することは我々がもってきた住文化を明らかにし、今後の住まいのあり方を考えていく上で、そしてまた日本の近代建築史においても意義のあることだと考える。

19世紀から20世紀にかけて世界各地で移住が行われているが、我が国が出移民国として登場してくるのは1880年代のことである。我が国最大の移民先はブラジルであり、1908年から1988年の間に24万1,895人もの人々が渡

っている。

これら移民たちの入植当時の住居はどのようなものであり、そしてそれらは地形・気候・風土などの自然・地域的条件と人的・文化的条件の違いの中で今日に至るまでどのように変化していったのだろうか。

ブラジル国内には開拓年代の異なる日系移住地が点在している。本研究ではその中でも戦前に開拓され、かつ現在においても居住地として機能している数少ない日系移住地の1つであるパラ州トメ・アスー (Tomé-Açu) 移住地 (図1-1) をとりあげ、そこに居住する日系移民住居の実測調査を行った。

本報告ではこの移住地における住空間の変遷過程を、住宅規模、室構成要素、間取り、外観、材料、日本的要素の観点から明らかにし、その要因について若干の考察を試みる。

*¹宮城工業高等専門学校 助手

*²宮城工業高等専門学校 技術専門職員

*³東北大学 助手

*⁴サンパウロ人文科学研究所 研究員

2. 調査地及び調査の概要

2.1 トメ・アスー移住地の概要

トメ・アスー移住地は、アマゾン河口にあるパラウの州都で人口120万人を有する都市ベレンから南に直線距離で約110km、標高11~30mの熱帯雨林に位置する。気候は平均気温27℃、年間降水量2,600mmである。

この移住地は1929年に鐘紡系「南米拓殖株式会社（南拓）」によって形成され、その後1962年に日本海外移住振興株式会社（JAMIC）によって、当初の移住地の南西に隣接して第2トメ・アスー移住地が形成された。

現在南拓によって開拓された第1移住地内にはアマゾン河に注ぐアカラミリン河西岸の河港に接して発達した旧市街地であるトメ・アスー市街地⁽¹⁾と、その西方約12km離れたところにクワトロボッカス（QUATRO-BOCAS）（写真2-1）と呼ばれる2つの市街地が存在する。これら市街地及びその近辺の居住者は、この市街地にある商業施設、組合や銀行などに賃金労働者として勤める日系人と、比較的近年にブラジル北東部から日系人農家のための農業労働者として就業の機会を求めてやってきた非日系人である。農地に居住する日系農業従事者は毎週金曜日になると買い物や支払い等のために市街地にやってくる。

形成から70年が経過する現在の総人口は、第1、第2合わせておよそ6万5千人、そのうち日系人口は1500人弱といわれている。第1移住地はトメ・アスー（Tomé-Açú: TA）市街地、ボアビスタ（BOA VISTA: BV）、イピチンガ（IPITINGA: IP）、クワトロボッカス（QUATRO BOCAS: QB）、アラリア（ARRAIA: AR）、マリキータ（MARIQUITA: MQ）、アグアブランカ（AGUA BRANCA: AG）、ブレウ（BREU: BR）⁽²⁾の8地区、第2移住地はジャミック1（JAMIC 1: JM1）、ジャミック2（JAMIC 2: JM2）の2地区に分けられている（図2-1、写真2-2）。各地区に居住する日系人農家世帯数は1997年11月現在で表2-1の通りである⁽³⁾。

2.2 調査の概要

1998年7月下旬から8月下旬にかけて第1次調査⁽⁴⁾を行い、日系世帯の住宅分布を把握し調査対象地区を決定した。第2移住地に居住するのは主に戦後移住者あるいは独立した2世である。今回はできるだけ過去の状況を知る目的から第1移住地を調査対象とし、数地区において住居の実測調査及びヒアリング調査を行った。

第2次調査では第1次調査を受け、ヒアリング項目を確認、新たに設定し1999年3月から4月にかけて実測調査及びヒアリング調査を実施した。

1997年11月の移住地調査報告によると第1移住地に居住する日系農家世帯数は173世帯となるが、ヒアリングにより日本に出嫁ぎにいて不在である世帯、及び結婚

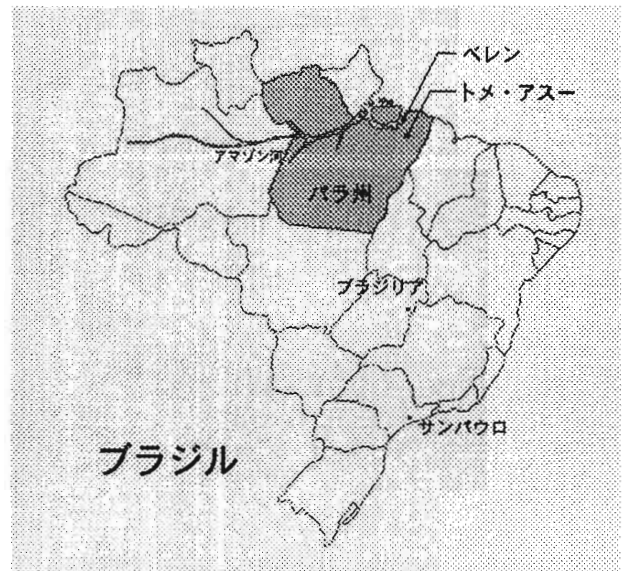


図1-1 トメ・アスー移住地の位置

表2-1 現住戸数と調査件数

地区名	農家世帯数	実住宅件数	アンケート数	分析平面数 (*2)
TA	7	4	4	3
BV	16	9	7	9 (2)
IP	9	8	6	5
QB	36	22	9	6
AR	11	10	10	14 (4)
MQ	13	7	5	6 (2)
AG	15	11	9	4
BR1,2	19	12	6	7 (1)
BR3,7	11	9	6	4
BR4,6	12	11	8	5
BR5,8	24	14	7	5
JM1	24	11		
JM2	24	12		
TOTAL*1	173	117	77	68 (7)

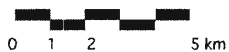
*1: JM1、JM2は含まず。

*2: 分析平面数中に含まれる過去に居住していた住居平面数。

しても両親と同居し続けている世帯を除くと、現住戸数は実質117戸であると考えられる。

第2次調査では事前に作成した住居規模、室構成要素、間取り、外観、材料、日本の要素に関連すると思われる項目、計65項目（戸主の世代、渡航年、引っ越しの経験、建設年、建設時の家族構成、建設費用、設計者、協力者、材料の選択理由、増改築年と部位など）からなる調査票を、アンケート票として配布し、実測調査に先立ち記入をお願いした。アンケート票回収時にヒアリングと実測調査を行った。都合上、実測調査に回ることのできなかった住居に関しては、各地区の区長にアンケート票（調査票）の回収を依頼した。また、実測調査にあたっては現住居の実測のほか、可能な限り過去に居住していた住居についてのヒアリングを行い、復元の略平面図を作成した。現在居住してはいないが、過去に居住していた住居が同一敷地内に存在する場合は、これについても実測調査を行い平面図を作成した。

トメ・アスー移住地



1. ボアビスタ地区
2. イピチンガ地区
3. マリキータ地区
4. アライア地区
5. アグアブランカ地区
6. プレウ地区

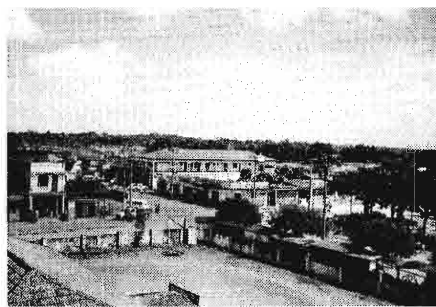
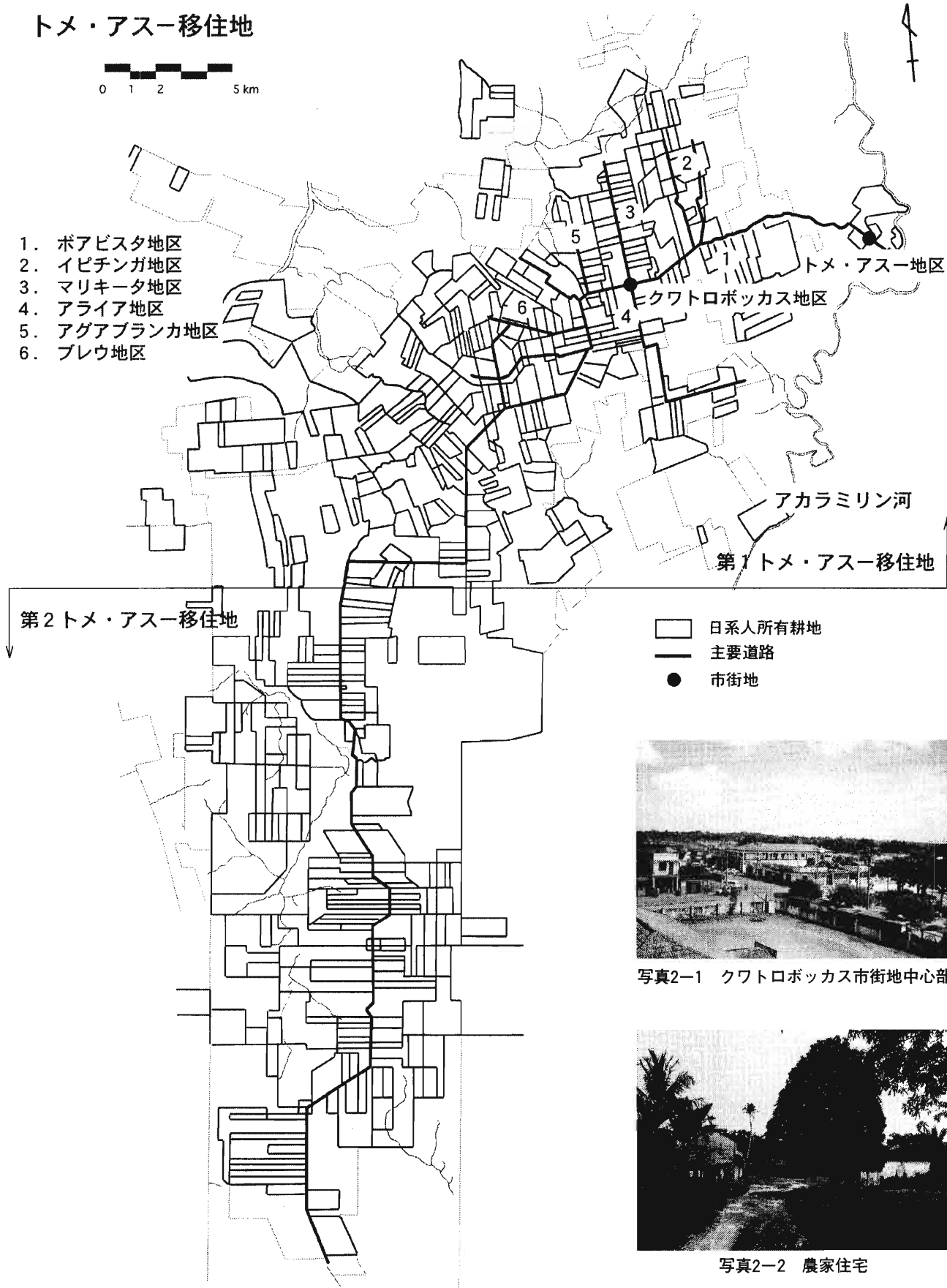


写真2-1 クワトロボッカス市街地中心部



写真2-2 農家住宅

図2-1 トメ・アスー移住地の全体構成と日系家族所有耕地

回収できたアンケート数は77例（回収率65.8%）であり、実測件数62件、ヒアリングによる住居平面入手件数21件、計83件が得られた。このうち今回は建設年代・建設者・室構成・規模の明らかな平面68件を分析に用いた。

3. 開拓時代の住居

トメ・アスー移住地には南米拓殖株式会社によってはじめから各入植家族のために住居が用意されていた。この住居については、復元された住居が資料館として存在する。この資料と先住者へのヒアリングによると南拓住宅はおおむね8m×10mの規模をもち、土間である炊事場兼食堂と高床である2室あるいは3室からなる住居であり、ほかの移住地よりはるかに恵まれた状況で移住地はスタートした。

しかし、入植後の生活は困難なものであった。当初南拓が奨励したカカオの作付けに失敗したあと、野菜・米の栽培を行うが決して安定した収入が得られず、加えて1936年には悪性のマラリアが発生し、移住地全体に蔓延したのである。転出者があとを断たず、1937年末には入植家族数352家族中、移住地に留まったのはわずか98家族であったという。南拓住宅は建設から3、4年も経過すると土台の腐食が進んだが、住宅を新築する余裕はなく、大抵の住居は腐食した土台を替えただけであり、建設したとしても南拓住宅と大差のない平屋の住宅であったといわれる。このような中で、比較的規模の大きな2階建ての住居を建設できたのは日本で大工の経験をもつごくわずかの入植者であり、建設にあたっては自分の耕地で伐採した木材を丸太のまま構造材として用いたといわれる。

一時期猛威をふるったマラリアによる死亡者が、目に見えて減少するのは1945年のことである。次第に生活が落ち着き、この頃からピメンタ（胡椒）が適正作物として定着し、徐々に植え付けられるようになっていった。このピメンタの国際価格が高騰した1950年代から1960年代にかけて移住地は好景気に沸き、それと同時に本格的な住居の建設が始まった。

4. 住空間の変遷

1950年以降に建設された住居68戸について建設者の世代・住居形態・規模・材料・室構成などの点について整理し、建設年代順に並べたのが表4-1である。便宜上5年ごとに区切りを入れてある。一部、市街地周辺部に居住している農家については住宅番号に網かけで示しているが、農村部との違いが特にみられないので同様に扱っていくことにする。以下、事例をあげながら住空間の変遷についてみていく。

4.1 住宅規模と室構成要素について

表4-1によると1964年までの住居には40m²程度のも

のから300m²を超えるものまで様々な住居が存在し、その約4割強を占める15例の住居は延べ床200m²以上、うちさらに5例は300m²を超える大規模な住居である。これに対し、1965年以降の住居32例の中では200m²を超えるのはわずか2例のみである。

1964年以前に大規模な住居を建設しているのはピメンタ景気で豊かになった戦前移住の人々である。一方、比較的小規模な住居は戦後移住の人々によるものといえる。1953年に第2次世界大戦勃発により中断されていた移住が再開された。戦後トメ・アスー移住地に入植した人々は、戦前移住者の呼びかけに応じてブラジルに渡り、ほぼ3年から5年で独立して各自で家を建設した。独立の際にはパトロンから住居建設のための資材を援助してもらったという稀なケースもみられるが、大抵は小規模な住居からスタートしたのである。

その後1960年代に入るとピメンタの根腐れ・胴枯れ病・マリキッタ病といわれるピメンタウイルス病が流行し、1980年代に入り、再びピメンタの価格が高騰するまで移住地の景気は低迷した。また国際相場の変動によってピメンタの価格が左右されるということもあり、この景気は長く続かず、1990年頃には日本への出稼ぎが目立つようになった。1965年以降の住居規模に関してはこのような状況が関係しているといえよう。

室構成要素についてみると住居規模と同様に1965年頃を境として変化がみられる。1964年以前のいくつかの住居では「広間」、「台所から独立した食堂」、「店」と呼ばれる室が存在したが、1965年以降の住居にはみられなくなっている。

室構成要素の変化は移住地の社会状況と密接なかわりをもつ。当時、移住地には冠婚葬祭を行うための公共施設がなく、冠婚葬祭などの行事は各自の家で行わなければならないが、普段あまり使用することのない広間はそのためだけに設けられていたし（図4-1、写真4-1）、旅館がなかったことから外部からの客人には、どこかの家に宿泊してもらう必要があった。そのため、食堂も接客に耐えるような「独立した食堂」が用意されたといえよう。特に移住地で功労者として讃えられる人々の住居においては専用客室の設置が見受けられた（図4-2）。また、現在のように市街地が形成されておらず、トメ・アスー産業組合と組合員の間においてのみ日常生活に必要な物資の売買が行われていた当時は、自耕地内で働くブラジル人労働者に供給するための物品をパトロンが一括購入し、一時的に保管する必要があった。この物品を保管し、かつ労働者に応対するための室、すなわち移住地の人々の呼ぶところの「店」が用意されたのである。これらの空間は、入植35周年の記念事業の一環として、1967年に文化会館が落成しそこで各種催しを行うことができるようになり、また旅館や個人の商店の進出によっ

て次第に市街地が形成されてくるようになると、それ以降の住居内にはみられなくなっている。特別にこのような空間を各自で維持する必要がなくなったためである。

広間は弟の結婚式を意識して設けられたもの。しかし、実際には結婚式時の客寄せは住宅脇の倉庫で行われた。

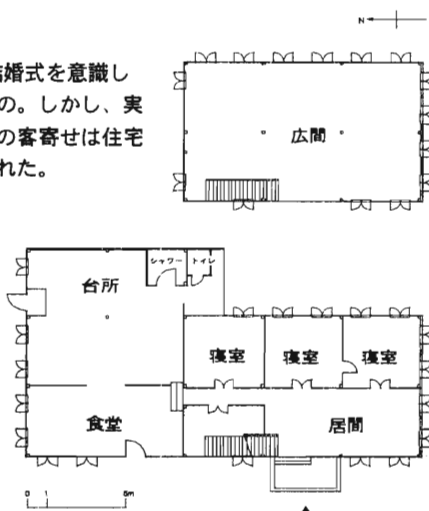


図4-1 2階に広間をもつ1960年建設の木造住宅

すなわち住居規模も必然的に縮小したと考えられ、このような室構成要素の変化は一方で住居規模の変化にも関係しているといえよう。

戦後移民向けに発行された「トメアスー植民地案内」の中に、住居を建設するにあたっての当時の人々の意識をみることができる。ここに紹介しておく。

「1954年頃から、住宅の新築が、あちこちで始まった。……(中略)……保健を第一に考え、さらに、生活のうるおい、家庭的な心のゆとりのよりどころとして又、



写真4-1 広間内観

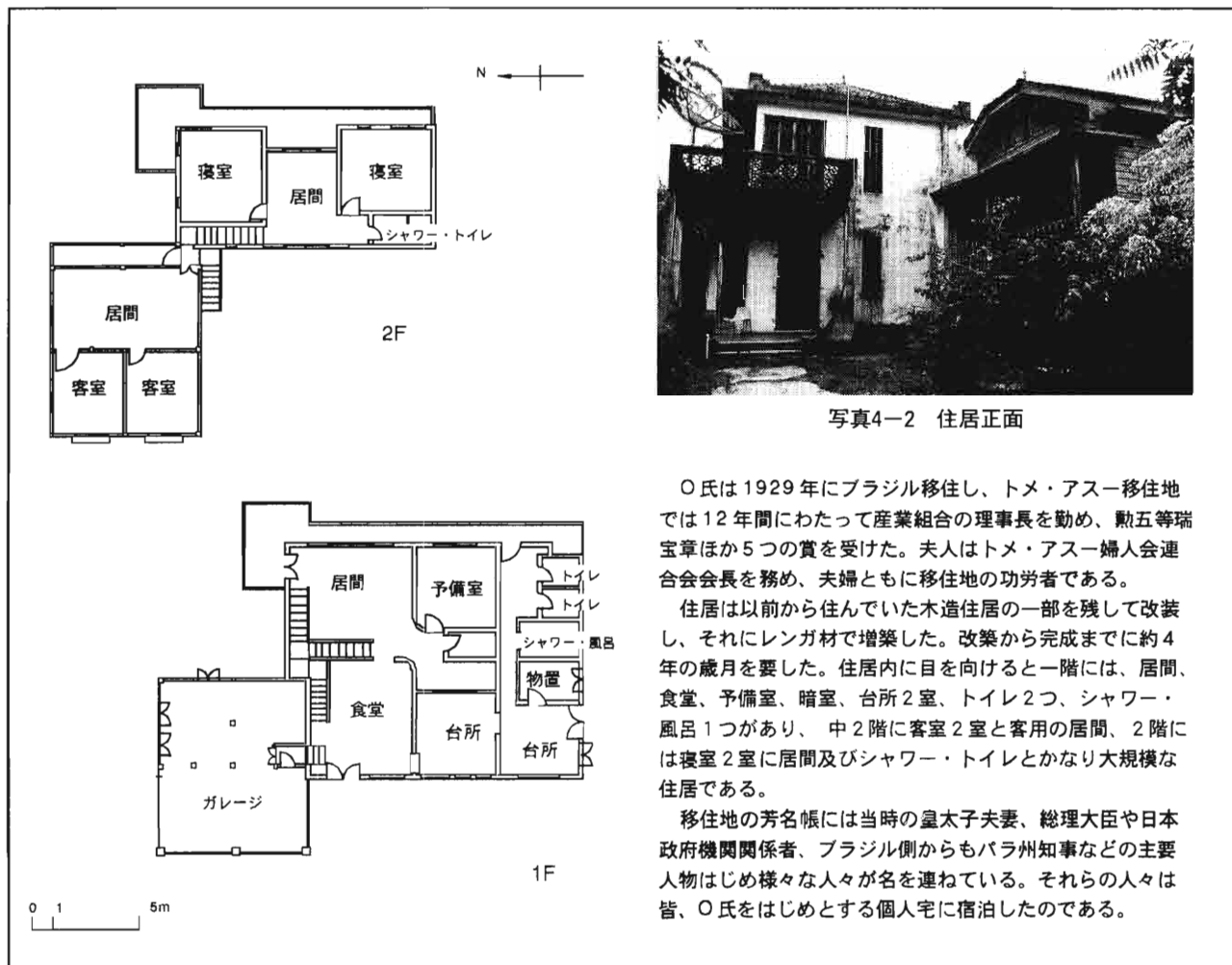


写真4-2 住居正面

○氏は1929年にブラジル移住し、トメ・アスー移住地では12年間にわたって産業組合の理事長を勤め、勲五等瑞宝章ほか5つの賞を受けた。夫人はトメ・アスー婦人会連合会会長を務め、夫婦ともに移住地の功労者である。

住居は以前から住んでいた木造住居の一部を残して改装し、それにレンガ材で増築した。改装から完成までに約4年の歳月を要した。住居内に目を向けると一階には、居間、食堂、予備室、暗室、台所2室、トイレ2つ、シャワー・風呂1つがあり、中2階に客室2室と客用の居間、2階には寝室2室に居間及びシャワー・トイレとかなり大規模な住居である。

移住地の芳名帳には当時の皇太子夫妻、総理大臣や日本政府機関関係者、ブラジル側からもパラ州知事などの主要人物はじめ様々な人々が名を連ねている。それらの人々は皆、○氏をはじめとする個人宅に宿泊したのである。

図4-2 専用客室をもつT.O.氏の住居(1959年建設)

子供たちの小さなあり方も考慮に入れ、炊事場、食堂サロンを十分広くとりいれてある。シャワー、風呂場、水洗便所なども完備している。窓の大きな涼しい部屋で、家庭内の団楽や読書やマージャンが、気持ちよくできる部屋があり、いつでも旅の人を招き入れて、ゆっくり滞在していた。ける設備が、ととのえられている。」

4.2 材料・外観の変遷

建築材料に着目すると、1950年代においてはレンガが大分普及してきていると思われるが、1960年代、1970年代では再び木材が主流となっている。そしてそれ以降の1980年代からは住居21例中19例がレンガ造と、ほとんどの人がレンガを選択している。

1960年代、1970年代に建てられた住居の多くは、呼びかけに応じて移住してきた戦後移住の人々の住居である。彼らは経済的理由から木造を選択したといえる。レンガは金銭を出して購入する必要があったが、木材は自分の耕地からいくらかでもただで入手することができたのである。自らあるいは労働者を使って木挽きした木材を製材所に運んで板にするほうがはるかに安価であった。また

レンガは積み上げるのに時間を要するが、木材であればわずか1日で組み立てることも可能であったということも理由の1つとしてあげられている。

近年においては、木材はシロアリなどの虫害に弱いという理由に加え、それまで用いてきた比較的虫に強い材が、伐採の進行につれ入手困難となり価格が上昇していることもまたレンガを選択するようになってきている原因の1つといえよう。

外観についてみると1965年以前に建設された住居の場合、住居規模にかかわらず、前面に張り出したベランダをもつのが特徴的である。中でもレンガ2階建てのいくつかの住居においては2階部分にもベランダを有し、また木造2階建住居では、入母屋をかけるなどした立派な構えのベランダ玄関をもつ。現地ではこれらの威風堂々とした印象を与える住居を好況期の作物（ピメンタ）にちなんで「ピメンタ御殿」と呼ぶ。

それ以降、今日に至るまでの住居についてベランダ面積及び形態に着目すると、面積は増加傾向にあり、当初主に前面のみであったベランダが、住宅を取り巻くように変化していく傾向にあることが分かる（図4-3）。

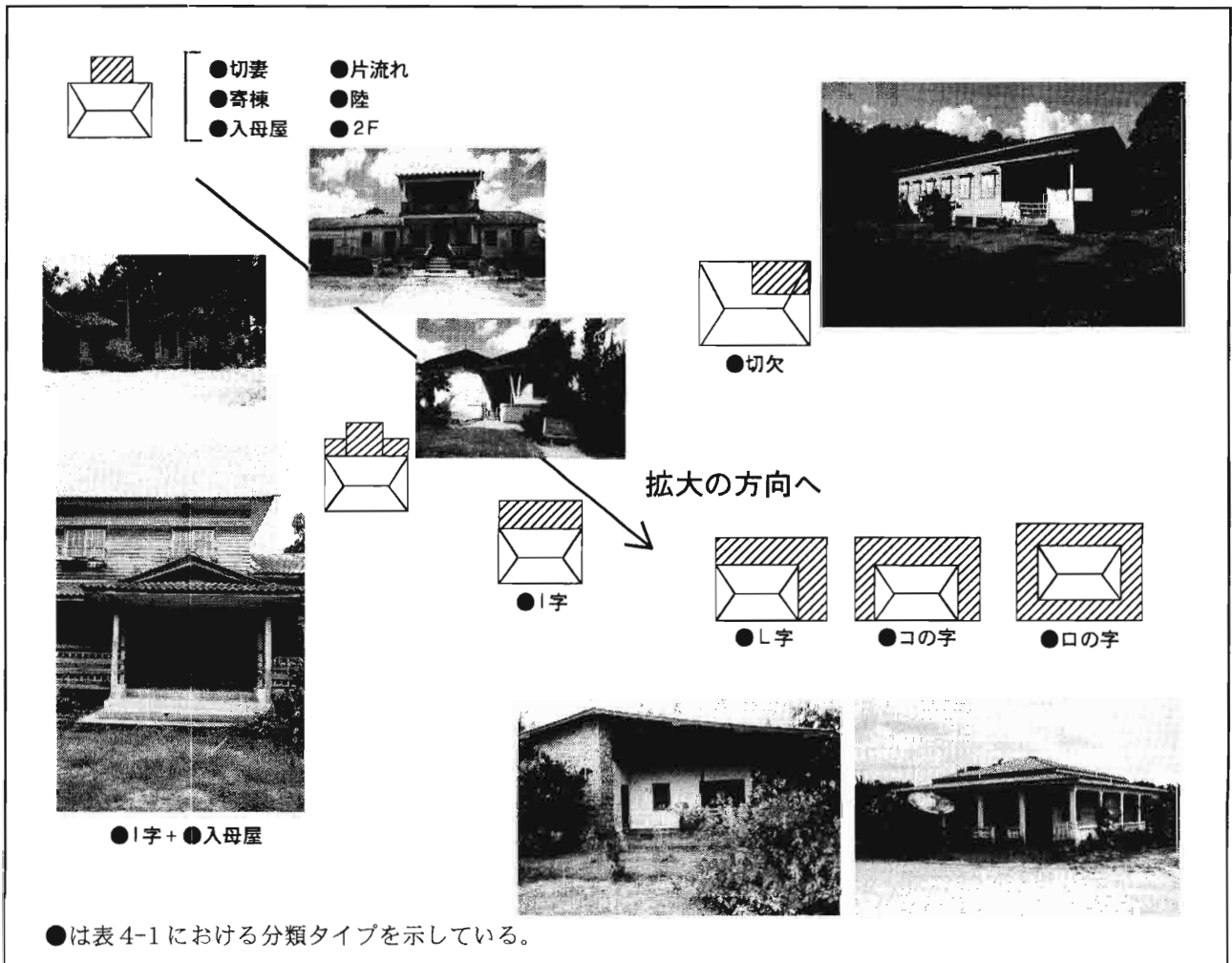


図4-3 ベランダの推移

アマゾンにあるトメ・アスー移住地では、奥行き3mほどのベランダを設けていても、雨期には毎日一時的に住居内に吹き込んでくるほど激しい雨がふる。また外壁に直射日光が当たると、特にレンガ住居では耐え難いほど室温が上昇する。レンガ住居の増加に伴い、これらの外壁を雨や直射日光から守るために一層ベランダ規模が拡大してきたと考えられる。

4.3 間取りの変遷

「居間」「台所」「寝室」の配置方式から次の5つのタイプに分類した。これをまとめたのが図4-4である。

年代を追ってその傾向をみると(表4-1)、おおむねタイプIからタイプIII, IV, Vへと次第に移行していく様子が分かるが、一部1950年代、1960年代に建てられているピメンタ御殿と呼ばれるレンガ住居においては、既にタイプIV, Vの間取りが主流となっている。

タイプIからタイプVへの変化の流れは、接客に対する考え方の変化及び家族に対する考え方の変化を示しているように思われる。すなわち、タイプIからIIIへの移行では家族空間から接客空間が分離し、タイプIIIからV

への移行では私的空間の独立性が一層強まっている。この間取りタイプIV, Vは現在のブラジル住居一般にもよくみられる。一方、1950年代、1960年代に建設されたレンガ住居は当時移住地の公共建築物を建設するために、ベレンから呼ばれて移住地に来ていたブラジル人設計士の設計によるものである。日系人住居の間取りの変化に関しては、これらの住居がその後のトメ・アスー移住地における住居建設のモデルとなったとも考えられる。

また、「浴室」「トイレ」空間の配置方式を分類したのが、図4-5である。年代を追ってみるとタイプAからタイプDへの移行がみられる。別棟として設けられていたものが次第に住居に付属し、さらに住居内に設置されるようになった。住居内においても、当初は主に台所の隅に設けられる傾向が強かったが、近年においては寝室の側に設けられるようになってきている。

「浴室」「トイレ」空間は技術的・経済的条件が整うに従い、住居内部に追加されてくる。これまで「浴室」「トイレ」を別棟として住み続けてきた人々も、1980年代後半からは増改築によってこれを住居内に設置するようになってきた。日本への出稼ぎによって得られた収入

	タイプI	タイプII	タイプIII	タイプIV	タイプV
配置方式模式図					
特徴	SALA(居間)中心型: 居間を通して各空間へ移動。居間で接客と団樂の両方が行われる。	SALA(居間)中心型2: タイプIとタイプIIIの混合。	COZINHA(台所)中心型: 台所(食堂)を通して各空間へ移動。居間では接客、台所では団樂が行われる。	ホール中心型: 各空間がそれぞれ分離。廊下・ホールでつながっている。	ブラジル一般型: 公と私(個人)の空間の分離。

図4-4 「居間」「台所」「寝室」の配置タイプ

	タイプA	タイプB	タイプC	タイプD
配置方式模式図				

図4-4、5 共通略記号
 S : SALA (居間)
 C : COZINHA (台所)
 Q : QUARTO (寝室)
 : 廊下、ホール
 : 「浴室」「トイレ」の両方、あるいはいずれか一方

図4-5 「浴室」「トイレ」の配置タイプ

の一部をこのための費用に充てている場合もみられる。

近年においてはさらに「専用の浴室・トイレを付属する寝室」が出現するようになり、寝室の私的空間としての意味合いがより強まっている。このことは「居間」「寝室」「部屋」の配置において私室同士の独立性が強まってきていることと表裏一体の関係にあるといえよう。

4.4 日本の要素について

ピメンタの景気のよい時代には、木造住居・レンガ住居ともに随所に日本的な要素がみられる。木造住居においては8割以上が土間^(注5)を有しているが、その中でも特に、図4-6、写真4-3の住居のように日本の農家的間取りをもつものがいくつか存在する。意匠に関するものとしては玄関、引違い戸、繰り戸、続き間、縁側といったものの存在があげられる(図4-7、写真4-4, 5)。レンガ住居においても、ブラジル式一辺倒の住宅でなく、ほかの木造住宅と同様に、食堂を含む台所部分を、1段低く土間にしているものが見受けられる(図4-8)。これらの住居では日常生活において、台所で靴を脱ぎ室内へ上がる。また開口部に日本風の意匠を施した引違い戸が設けられたり、1例ではあるが、床の間のある続き間

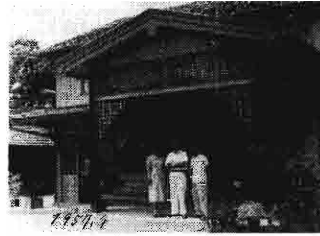


写真4-4 (K氏寄贈)

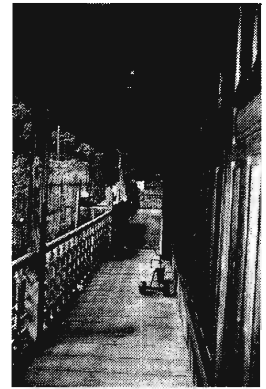


写真4-5
縁側のベランダ

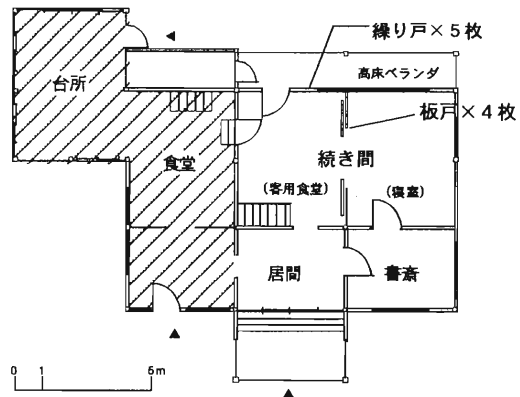
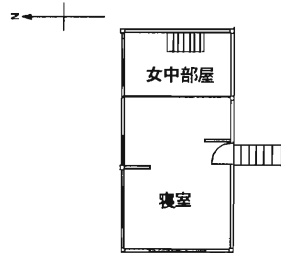
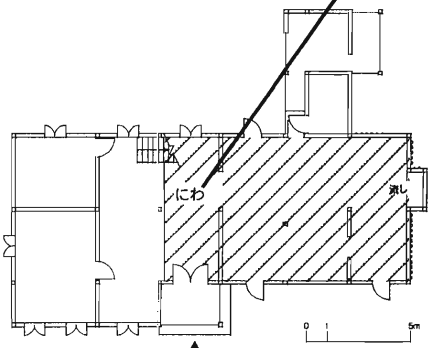
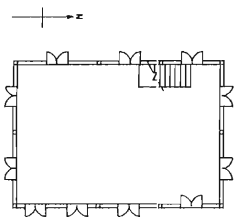


図4-7 続き間をもつ住宅 (1951年建設)



写真4-3 入口より「にわ」を見る



▨ : 土間部分 (図4-6、7、8) 共通

図4-6 農家的間取りをもつ住居 (1958年建設)

多い時で6~7家族の労働者を使っていたというO氏の住居。当時のO氏の日常生活は、朝5時の起床にはじまった。午前6時から午後4時まで農地で働き、その間に3度の休憩をとっていた。午前8時からメレンダ(朝食)のために30分、午前11時から昼食のために1時間、そして午後2時からトマル・カフェ(軽食)のために30分。住居の建設にあたって、農作業の途中で靴を脱がずに休憩出来るように、台所、食堂、トイレを土間にしたという。

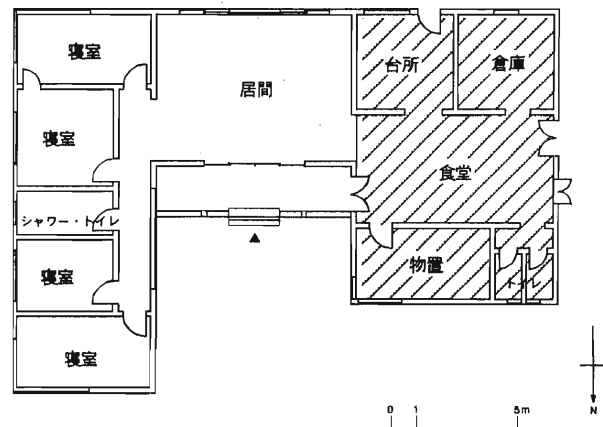
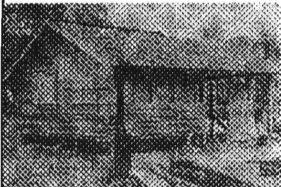
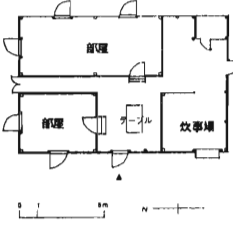
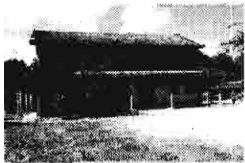
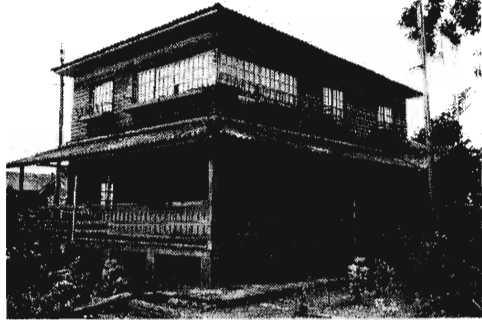



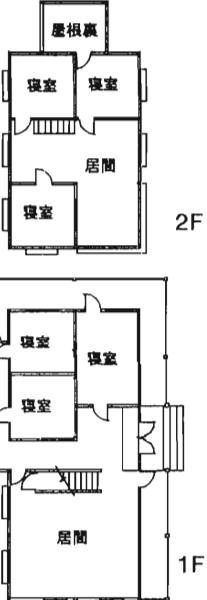
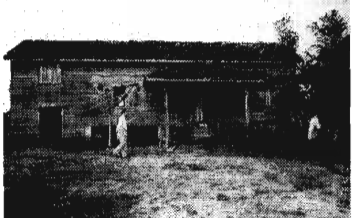


図4-8 土間をもつレンガ住居 (1959年建設)

	1929年	1950年代	1960年代
変遷		建築ブーム 戦前一世によるビメンタ御殿の出現 ・日本的意匠要素「練り戸」「縁側」「続き間」「引違い戸」など ・「広間」「店」「客用寝室」の存在	戦後移民による住宅建設
外観・平面	注6)  <p>南拓住宅</p> 	 <p>ビメンタ御殿</p>   	  <p>戦後移民の木造住宅</p> 
移住地年表	開植 南拓の引き上げ 直営農場の閉鎖、コロノ制度解消、農事試験場の廃止 35年農業組合成立 適正作物の模索 42-45年世界大戦 マラリアとの闘い 42年次移住地内98家族	52年上半期より胡椒の値の高騰 53年第一回戦後移民入植 総戸数 754 (内日本人 324)	62年第二移住地の建設 67年文化会館落成

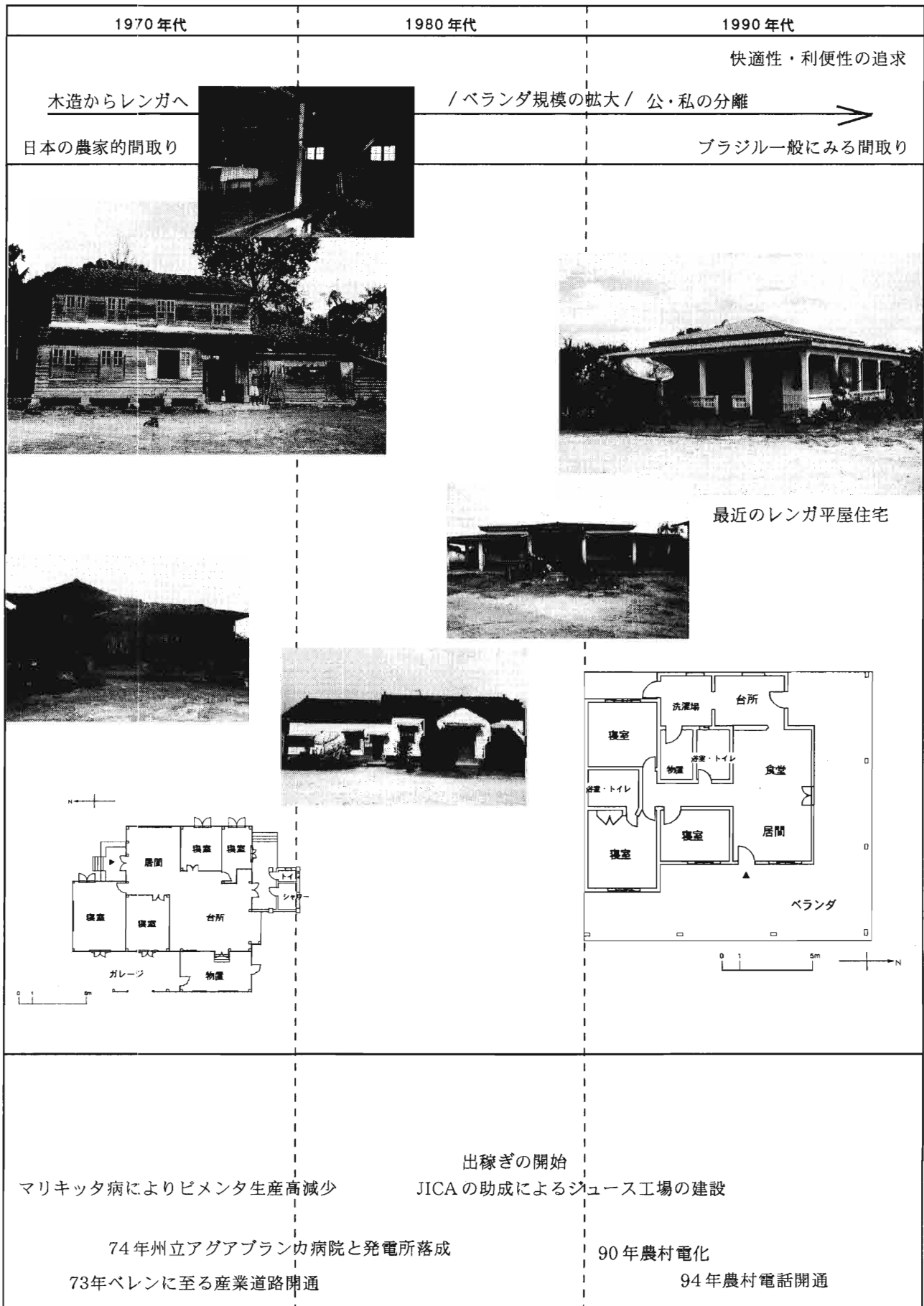


図4-9 トメ・アスー移住地における住居の変遷

が設けられた住居も存在する。しかし、近年において建設されているレンガ住居に、日本的要素を見出すことは難しい。

日本的要素の出現は、ピメンタ景気による繁栄によって実現したものである。家屋建築のために、わざわざ日本から大工を呼び寄せることが可能であったし、経済状況が好転し一大建築ブームがおこったために、大工仕事が職業として成立できたのである。日本で建具師や指物師であった人々が大工と組み、あちこちの住居を建設して回った。時間の経過とともに世代が移り、現在トメ・アスー移住地においては、ブラジルで生まれ教育を受けた2世が地域社会における中心となってきた。トメ・アスー移住地に居住する大多数の日系の家庭では、高等教育を受けさせるために子供たちをベレンの学校へ通わせる。回収できたアンケートによると、実に1/3の家庭がベレンに住宅、あるいはアパートを有している。ベレンでブラジル式の生活様式を身に付けた彼らが建設するのはブラジル式の住宅である。2世、3世たちにとって日本の文化というものとはブラジルで生きていくためには必ずしも必要なものではなく、それは住居の中からも姿を消していく傾向にある。ただトメ・アスー移住地において靴脱ぎの習慣は現在でも残っており、アンケートでは約8割の人が靴を脱いで室内に入ると答えている。近年建設されているレンガ住居の場合でも、日系人の場合、人々はベランダで靴を脱いで入居している。

5. まとめ

以上、トメ・アスー移住地の住空間の変遷を、住居規模、室構成要素、間取り、材料、外観、日本的要素に着目してみた。

住宅規模、室構成要素のなかで具体的にあげた、ピメンタ御殿と呼ばれる大規模住宅とその住宅内に設けられた「店」「専用客室」「広間」の存在及び消滅に関しては、経済的な要因に加え、地域社会、特に地域における施設建設状況との関わりから、材料、外観、日本的要素のなかで述べた「木造からレンガへの移行」、「ベランダ部分の拡大」といった変遷項目に関しては、おもに気候風土との関わりから説明できよう。そしてまた気候風土への適応は、外観上での日本的要素の消失にもつながっている。間取りの変化に関しては2世あるいは3世のアイデンティティあるいは家族観といったものが大きく関わっていると思われるが、こうした文化的条件に関しては今後の検討課題としたい。

気候風土への適応で説明できる項目および間取りにおける「公・私分離」に関しては、同様の観点から調査

を実施したサンパウロ州のバストス移住地における農家住居の変遷⁷⁾と年代の差こそあれ、ほぼ共通している。今後、世代ごとの家あるいは家族に対する意識および、ブラジルの住文化にも着目しながら、両移住地における日系移民の住居の特質をより明らかにしていきたいと考えている。

謝辞：

本調査においてトメ・アスー移住地の皆様、並びに諸機関に多大なる御支援と御協力をいただきました。また、考察にあたっては、東北大学大学院教授の飯淵康一氏に得ることが多く、東北大学大学院助教授の小野田泰明氏、宮城工業高等専門学校教授の加藤正一郎氏、同助教授の伊藤憲雄氏には貴重な助言をいただきました。ここに心から感謝の意を表します。

<注>

- 1) トメ・アスー移住地内には移住地名と同名のトメ・アスー地区が存在する。本稿では旧市街地を有するこの地区を移住地全体と区別するために地区をさす場合にはトメ・アスー市街地と表記している。
- 2) プレウ地区はさらに8区に分けられている。
- 3) トメ・アスー文化協会(編)：1997年度事業決算報告書、トメ・アスー、1998
- 4) 第1次調査は財団法人日本科学協会より助成を受け実施した。
- 5) いわゆる土間をさす。土足で利用することを前提として大抵の場合セメント敷きにしてある。
- 6) トメ・アスー文化協会(編)：みどりの大地—トメ・アスー開拓五十周年史、1998、サンパウロより転載
- 7) 熊谷広子：ブラジルにおける日系移民の住空間の変遷について—バストスを事例として—、東北大学修士論文、1997

<参考文献>

- ・泉靖一編著：移民—ブラジル移民の実態調査—、古今書院、1957
- ・森幸一：アマゾン地域からの日系人出稼ぎ現象—トメ・アスー移住地の事例を通して—、移住研究30号 国際協力事業団、1993
- ・トメアスー産業組合：トメアスー植民地案内
- ・国際協力事業団：アマゾン地域の農産業と日本人(集団地とその農業)、1988
- ・汎アマゾン日伯協会編：アマゾン 日本人による60年の移住史、1994

<研究協力者>

Any Sampaio Lima サンパウロ在住
村上 良太 宮城工業高等専門学校 専攻科1年
後藤 浩昭 宮城工業高等専門学校 建築学科4年
本内 昌志 安藤建設